

牧師所感： 九十歳。何がめでたい

明日は聖なる日、全知全能の神様（キリスト教では三位一体の神「父、子、聖霊」）に礼拝をお捧げする日である。一年 365 日、52 週の礼拝は一度も欠かした事はない。

ゆうげ

夕餉の時間、家内と対座して食事を取る。ところで筆者の食事は色とりどりだ。

先ず最初の食べ物は色とりどりの野菜のオンパレードだ。そして汁物のみそ汁、肉類、そして最後に御飯だ。それに加えて家内が裏庭で育てた色々の野菜だ。どれもこれもおいしい。食べながら家内に以前から西洋野菜の名前を聞いたことで覚えていたが、赤と黄色の西洋唐辛子を食べながら、以前家内が教えてくれた名前を忘れてしまった。何故かいくら思い出そうとしても思い出せない。或る本に書かれていたが、物を忘れたらすぐ聞かないで思い出せ、何日でも、と。それも今はじれったい。家内にすぐ聞いたら、“パプリカ”と教えてくれた。

おぼつか

さて、年を取るとすぐ物を忘れる。歩くのもヨチヨチで覚束ない。目もかすむ。耳も遠くなっている。わけもなく、涙が出る。トイレも近い。でも主日を迎えればカラ元気でも出して、主日を務めようと頑張る。これが取りも直さず九十二歳を生きる筆者の哀れの姿である。で、冒頭の題は筆者ではない。筆者が愛読し、その文筆を受け継ぐと努力してやまない、今は亡き作家の佐藤 愛子女史である。なかんずく九十を越えて生き長らえた女史の余生は、筆者が抱えている苦難を抱えておられた。

でも佐藤女史とは別の生き方をされたカトリック信者の曾野 綾子女史は『90 歳、こんなに長生きをするなんて。』の御本を上梓された。御本の中には佐藤女史も曾野女史（最近 召天）も、人間として良く生きる秘法を説いて下さっている。有り難いことである。

さて、終わりに筆者も一言。筆者も長生きするにしたがって益々魂がシャープになって主なる神に仕えたい。読者諸賢に幸あれと祈る。